

<特集：RECCA-Kochi>

「気象変動」と「民間人力」

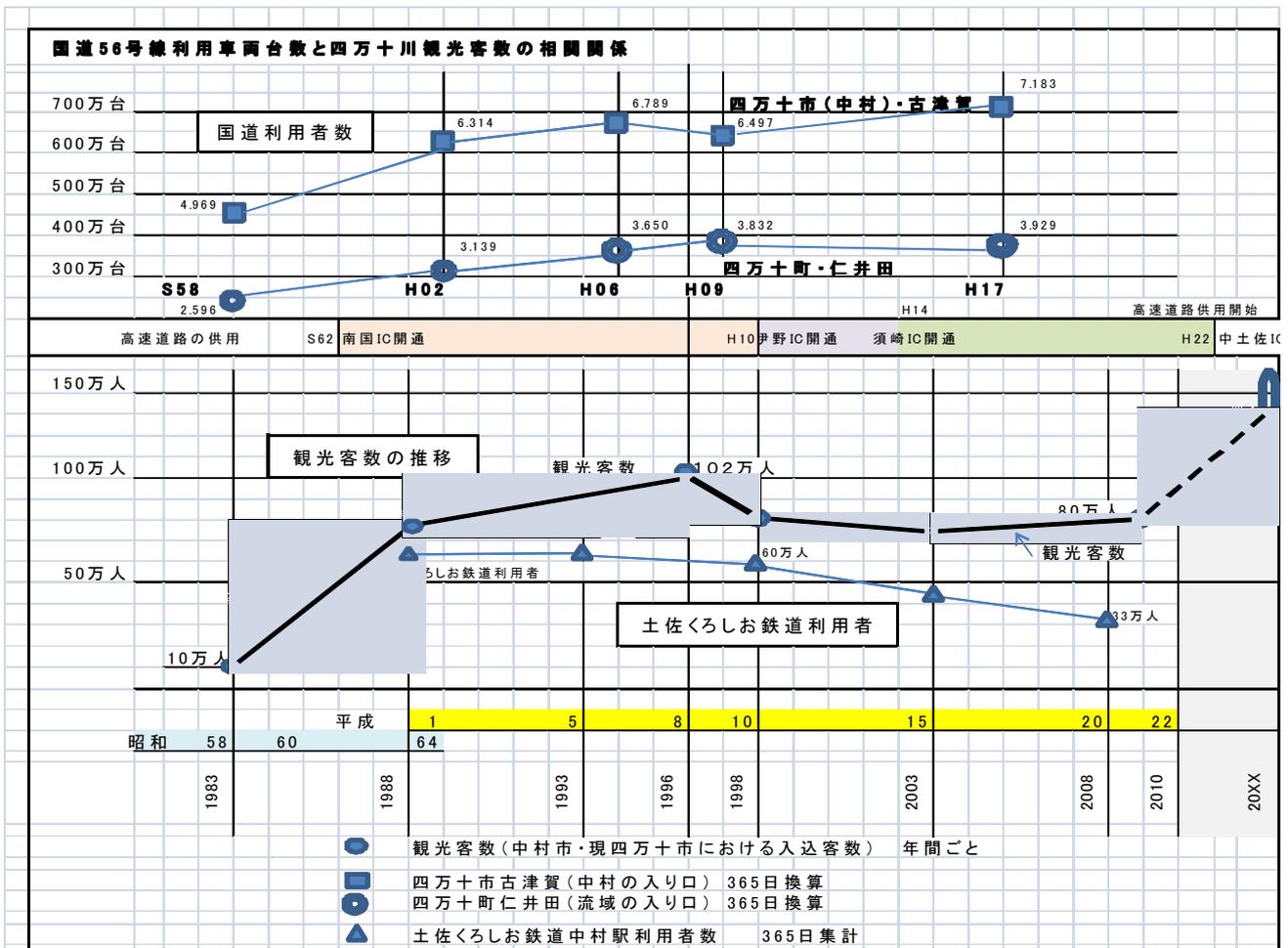
西内 燦夫*

"Abnormal Weather" and "Citizen Power"

Akio NISHIUCHI

1. 四万十川観光の推移

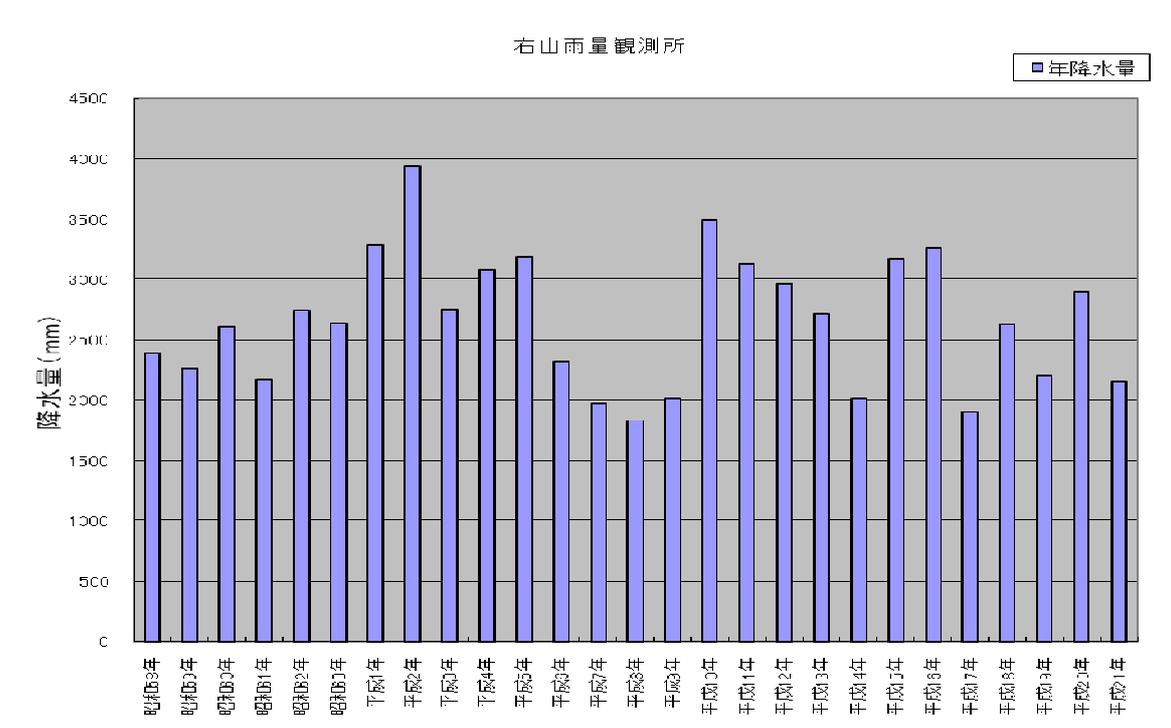
昭和58年(1986)にNHKの全国放送で四万十川が全国に紹介されて以来、「四万十川観光」は急激に伸びた。数字的には、それまでの「足摺岬観光」の休憩に立ち寄るだけで、ゼロに等しかった四万十川下流の中村市(現在の四万十市)への観光客数がわずか14年で100万人を超した。これが「第1期四万十川ブーム」である。この間、四万十川流域に住む人々は、「倍々ゲーム状況」という観光客の増加に驚きながら、そして戸惑いながらも、よろこんで観光客を迎え入れたのだが、平成8年(1996)の102万人をピークに観光客は減少した。その原因とは、一般的には「沢山の台風の襲来」や「渇水騒ぎ」などの「異常気象」と言われるが、地元意見ではそうではなく「気象」に対する報道のあり方…と思われる。



* 四万十川流域住民ネットワーク 〒787-0022 四万十市中村新町1-10

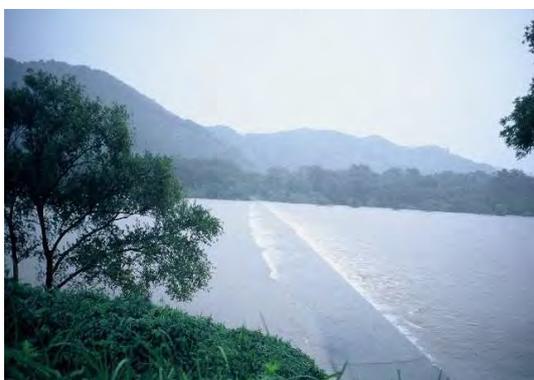
確かに平成8年からの「沢山の台風の来襲」や「極度の渇水」は、短期的な比較では特別ではある。しかし「四万十川観光」が岐路に立つほどの大騒ぎの材料ではない。むしろ長期的に見れば、多少の変化は「洗浄+再生」という自然界のリズムを保持する為の必要事象と考えられる…従ってマスコミの騒ぎ方の方こそが異常だったと思える。

四万十川下流の四万十市(旧・中村市)での昭和58年からの年間雨量(計測場所:国土交通省中村河川国道事務所内)の計測値にも周期的多雨と少雨が見られる。そしてその「サイクルが短くなった」とも言える。しかし、年間の数字としては「異常」と呼ぶまでの大きな変化ではない。従って平成9年以降の観光客の減少は、気象要因だけが原因ではない事がわかる。



国土交通省・中村河川国道事務所提供資料

報道の是非はともかく、気候の変化が四万十川の自然に与える影響は少なくない。中でも洪水はなくてはならない異変なのだ。それが効果的か否かの区別が「報道任せ」では曖昧なので詳細を整理してみる。



*洪水時の沈下橋



*通常の状態

佐田の沈下橋

2. 大気変動と四万十川観光

四万十川観光客の減少の原因の正体は「土佐の台風」と「讃岐の渇水」だが、実際には地元民としては「経験したことがある事象」ばかりであり、それらの「過剰な報道」こそが原因だと思われている。その一方で「東日本大震災」も異状と呼ぶならば、異状には質的に二種類あると考えられ、それらは何らかで区別すべきであるとも考えられる。そこで、四万十川では地元民の経験して来た「小さな異状」と東北関東大震災のような「未曾有の異常」とを区別してみた。これはあくまで語彙の個人的な整理である。

語彙の私的な整理表					
総称	表現	英字表現	解釈の内容	サイクル長	人体での事例
大気変動	異状気象	change	単発的な小さな変化	2～3年	盲腸・麻疹
	異常気象	unformal	長期スパンでの大きな変化	30年以上	骨折・癌

「東日本大震災」のような変化はあきらかに「異常 abnormal・unformal」（悪い異変）である。しかし四万十川における台風や渇水騒ぎは「許せる異状」である。とすれば、平成8年以降の四万十川の観光客が減少した気象変動は「想定内の小規模な change」であって、環境の健康維持の為にはむしろ必要な変化だと言える。従って「観光客の減少」とは、異状と異常の区別をしなかった「過剰報道」が原因となる。



通常の四万十川



洪水の四万十川

* 右の写真は「大水」で「異状」とは言えるが、「異常」ではなく「自然の営み」の範囲内である。

3. 四万十川の「異状気象(change)」と「異常気象(abnormal)」

四万十川における「良い異状 change」は、その美しさを維持する為の「自然界の必要作業」だと一方的に解釈したが…その吟味は別の問題として、今注目して対処すべきは「悪い異常 abnormal」である。

その悪い異常とは目には見えない「地球温暖化」が原因と思われる現象である。これは自然界の深部の変化であって、その多くの速度はゆるやかで「四万十川の生物環境」に、もう既に徐々に表れつつある。それはその速度の遅さ故に流域住民でさえ気が付き難い事象ばかりである。具体的な症状としては…熱帯魚や小判鮫が四万十川で確認されたり、春に咲くべき花が秋に咲いたり、蝶やトンボの生息北限が台湾から四万十川まで北上したり…そして色々の外来種の生息できる環境が整ったりしていることである。住民の多くは、それらが四万十川の自然環境維持の為には良くないと思いつつも、「具体的損害の見えにくいこと」や、「自らの専門的科学的視野の欠如」という理由から、目の前にある危機とは感じていない。しかし、台風や少雨の原因追究の際に必ず出てくる「地球温暖化」という言葉から「漠然とした不安」を抱いている。



4. 四万十川流域住民ネットワークという「民間人力」

このネットワークを形成する 23 の民間人の団体は、四万十川流域の全市町村に存在する。発足時の目的が「四万十川全流域の環境保全の為の意志統一」だった関係で「源流から海辺まで…」全域に存在する。そのメンバーの常時の活動はその団体の各々の存在する地域限定が多いが、流域全体の為には「統一行動目標という四万十川の為の全員参加のプログラム」に沿って活動する…との約束がある。従って目的が明確で意志の統一があれば、その広域的な活動機能を利用して四万十川全域に及ぶ「広い面」をカバーする調査を含めた活動も可能である。

そこで「地球温暖化の初期症状」についての「生物等の調査」を、気温差のある「海辺から山奥まで」の広範囲に同時に展開し、そこで得たデータを蓄積して、他地域の事象や都会での状況と符合させることが可能である。その事によって即「大気変動」の原因を知る事は困難ではあるが、その糸口の端緒でもを知ることが出来るのではないかと思われる。その際の「同一の調査項目」を考えた時、科学的には素人の集団の同時調査なので…植物を思いつく。魚類では上下流では環境が違い過ぎ魚種も異なる。鳥や蝶では専門的過ぎる。星座の観察や大気の計測も条件は整わない。全域で専門的でない調査と云えば「植物」が消去法で残ることになる。

四万十川の川漁師で「四万十川に 40010 本の桜」を咲かそうと運動している人が居る。その運動への協力と調査を兼ねて、桜の状況調査を全流域で行い、そして積年の比較や全国との比較から「地球温暖化」や「流域山林の変化」を知る事が出来るのではないか…等と単純な調査の計画している。

「地方の地域住民が出来る事」とは「住民にしか出来ない事」であり、それは即ち「住民がしなければならぬ事」のように思える。

(原稿受理 2011 年 4 月 9 日)